

Title	セルフエスティームに関する行動遺伝学研究の展望： 行動遺伝学の知見と学校教育における精神保健活動との関わり
Sub Title	Review of behavioral genetic studies on self-esteem : the relationships between the evidence of behavioral genetic studies and the activity of mental Health in School Education
Author	鎌倉, 利光(Kamakura, Toshimitsu)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2006
Jtitle	哲學 No.115 (2006. 2) ,p.221- 238
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of the article is to examine the associations between the evidence of behavioral genetic studies on self-esteem and the activity of mental health in school education. From the evidence of behavioral genetic studies, self-esteem was significantly explained by genetic and nonshared environmental effects, but not significantly influencing shared environmental effects. A few studies of self-esteem using longitudinal behavior-al genetic design also reported that self-esteem stability was significantly influenced by genetic and nonshared environ-mental effects, whereas self-esteem change was significantly caused by nonshared environmental effects, but not significantly influencing genetic effects. On the other hand, in the activity of mental health school education, it is important to effectively intervene in the problems of bad mental health such as low self-esteem. In order to improve low self-esteem, according to the evidence of behavioral genetic studies that nonshared environmental factors influence self-esteem change low self-esteem, we need to explore the concrete aspects of nonshared environmental influences on self-esteem change.
Notes	特集教育研究の現在-教育の統合的理解を目指して- 教育心理学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000115-0223

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

—投稿論文—

セルフエスティームに関する

行動遺伝学研究の展望

——行動遺伝学の知見と学校教育における

精神保健活動との関わり——

——鎌 倉 利 光*

Review of Behavioral Genetic Studies on Self-esteem

——The Relationships between the Evidence of Behavioral Genetic Studies and the Activity of Mental Health in School Education——

Toshimitsu KAMAKURA

The purpose of the article is to examine the associations between the evidence of behavioral genetic studies on self-esteem and the activity of mental health in school education. From the evidence of behavioral genetic studies, self-esteem was significantly explained by genetic and nonshared environmental effects, but not significantly influencing shared environmental effects. A few studies of self-esteem using longitudinal behavioral genetic design also reported that self-esteem stability was significantly influenced by genetic and nonshared environmental effects, whereas self-esteem change was significantly caused by nonshared environmental effects, but not significantly influencing genetic effects. On the other hand, in the activity of mental health school education, it is important to effectively intervene in the problems of bad mental health such as low self-esteem. In order to improve low self-esteem, according to the evidence of behavioral genetic studies that nonshared environmental factors influence self-esteem change low self-esteem, we need to explore the concrete aspects of nonshared environmental influences on self-esteem change.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学（教育心理学）

1. はじめに

セルフエスティーム (self-esteem) は、自尊感情・自尊心あるいは自己評価に邦訳されており、自己概念 (self-concept) としばしば混同して使用される場合もみられる。実際にセルフエスティームと自己概念を明確に区別することは難しい。しかし、自己概念には“自分は「27歳である」, 「大学院生である」, 「背が高い」」等の多くの記述的な側面を含んでいるが、その全ての記述的側面に関しては必ずしも感情的な性質を伴うわけではない。したがって、自己概念とは自分自身に関するあらゆる記述的な側面を意味するものであり、それらの自己に関する記述的側面の中でも感情的側面な色彩に帯びたものがセルフエスティームであると定義できる (榎本, 1998)。さらに、セルフエスティームの定義に関しては、大きく二つに分類されている。それは、包括的セルフエスティーム (Global self-esteem) と領域固有のセルフエスティーム (Domain-specific self-esteem) である (Pelham, 1995)。

包括的セルフエスティームとは、自己概念を構成する数多くの自己の要素 (身体的・社会的・学業的等) が包括された全般的な自己に対する評価・感情のことを意味している。たとえば、Rosenberg (1965) によると、セルフエスティームとは多くの自己概念が包括された自分自身の属性に対する肯定的あるいは否定的な態度であると定義している。すなわち、自分自身の包括的な属性に対して否定的に捉えていることはセルフエスティームが低いことを示している。また、Rosenberg (1965) はセルフエスティームには二つの異なった意味があることを論じている。その一つの意味とは、自分が他者よりも優れていることから、自分自身を「非常に良い」と思うことである。もう一つの意味は、自分自身の価値基準と比較した場合において、自分自身を尊重し、価値のある人間であると考えることにより、自分を「これでよい」と思うことである。Rosenberg (1965) に

よると、セルフエスティームが高いことは後者の意味を示しており、自分を「これでよい」と思うことである。

領域固有のセルフエスティームとは、自己を構成する多面的な要素を包括的に捉えるのではなく、自己の各要素についての評価・感情を示している。領域固有のセルフエスティームを提唱する代表的な研究者の一人である Harter (1982) は、セルフエスティームを5つの領域（学業能力・運動能力・社会的承認・身体的外見・行動）に分類している。この領域固有のセルフエスティームの定義を重視する背景としては、包括的セルフエスティームでは測定できない個人内の各領域におけるセルフエスティームの差異がわかることである。たとえば、ある者は、学業能力についてのセルフエスティームは高いものの、身体的外見に対するセルフエスティームは低いこともあるだろう。これに対して、包括的セルフエスティームの定義を重視する Rosenberg (1979) は、領域固有のセルフエスティームの重要性を認めてはいるものの、必ずしも自己に関わる各領域の要素を私たちが明確に意識しているとはいえないと考え、包括的セルフエスティームによる概念を用いてセルフエスティームを測定することを選択している。また、包括的セルフエスティームと領域固有のセルフエスティームは全く異種な属性であるのか、あるいは両者の間には強い因果関係があるのかに関して検討されている。Winston (1996) は、Harter により提唱された各領域におけるセルフエスティームが包括的セルフエスティームに対して有意に影響していることを報告している。したがって、領域固有のセルフエスティームが包括的セルフエスティームとして統合されると推察される。しかし、両者の因果関係について検証している研究は少ないことから、この研究の見解が妥当であると考えるのは、現時点において早計であるかもしれない。このように、セルフエスティームに関する定義については今後検討すべき課題が挙げられるが、本論では包括的セルフエスティームと領域固有のセルフエスティームの定義を中心として¹⁾、次節に述べるセルフエ

スティームに関する行動遺伝学研究について概観していきたい。

一方、これまでのセルフエスティームに関する多くの研究では、セルフエスティームと精神的健康との関係について検証されてきた。ここでは、セルフエスティームの高低がもつ意味から考察していく。セルフエスティームの低さと不適応感とは密接に関連していることが多くの研究で実証されている。たとえば、セルフエスティームが低い者は、セルフエスティームが高い者よりも抑うつ感 (Brown, Andrews, Harris, Adler, & Bridge, 1986; Roberts & Monroe, 1994; Wild, Flisher, & Lombard, 2004) や孤独感 (Jones, Freemon, & Goswick, 1981) あるいは不安が高いこと (Abe, 2004; Byrne, 2000) が示されている。また、強いストレスの状況において、セルフエスティームの高い状態は不安を軽減し、精神的健康を促進させることが報告されている (Greenberg, Pyszczynski, Burling, Simon, Solomon, Rosenblatt, Lyon, & Pinel, 1992)。

ただし、セルフエスティームの高さは自己愛の高さに関連することから、セルフエスティームの高い状態が精神的健康度の高さを表しているのかどうかという疑問が生じるであろう。これに対して、小塩 (2001) によると、自己愛傾向を構成する要素における「優越感・有能感」と「自己主張性」の高さがセルフエスティームの高さに関連している一方で、自己愛傾向を構成する要素である「注目・賞賛欲求」の高さはセルフエスティームの低さに関連することが示唆されている。すなわち、セルフエスティームの高さと自己愛の高さが単純に関連しているとは言い切れないのである。また、自己愛傾向にも「健全な自己愛」と「病理的な自己愛」があり、小塩 (2001) が示唆するように、前者は「優越感・有能感」・「自己主張性」を示し、後者は「注目・賞賛欲求」を示しているとすれば、健全な自己愛傾向はセルフエスティームの高さに関連している反面、病理的な自己愛傾向の高さはセルフエスティームの低さを表しているものと解釈できる。よって、精神的健康面から考えると、セルフエスティームが非常に高

いことは、現時点において必ずしも望ましいと断定することはできないが、少なくともセルフエスティームの低い状態は、決して好ましいことではないと考えられる。

このように、セルフエスティームの低さに伴う抑うつ感・不安の高まりは、精神的健康に対する脅威となる。そして、この問題に対する予防・介入を含めた精神保健活動を行うことが学校教育において必要とされているのである。そこで、この問題に対する介入を含めた学校教育における精神保健活動の実践例について一つ挙げよう。大宮・清水(2003)は、セルフエスティームの形成に関わる学校内の友人に対する信頼感を育むことを含めたプログラムを学校教育において実践し、そのような介入が子どもの低いセルフエスティームを高めるための一助となる可能性があることを示唆している。確かに、仲間関係等を含めたさまざまな社会的環境はセルフエスティームを形成する要因であることが指摘されており(Petersen, 1987), このような環境状況が変化することに伴い、セルフエスティームが変動することは十分に予測できることである。しかし、たとえば学校教育の中で、セルフエスティームの形成に関わるある特定の環境的要因に対して介入を行うときに、その介入の効果としてどの程度セルフエスティームが変動するのかについて実証的に検討されていなければ、その介入を行うこと自体の意義は不明なままではないだろうか。

ここで、この問題を実証的に検討するためには、まず環境的要因と遺伝的要因について分離し、さらに各々の要因がセルフエスティームの形成に対して、どの程度寄与しているのか検討する必要があるのではないかと考える。そして、このことを解明するためには、行動遺伝学的手法を用いることが必要とされるのである。なぜなら、行動遺伝学的手法を用いることにより、ある一時点におけるセルフエスティームに影響する遺伝的要因と環境的要因の相対的な寄与率について推定できるだけでなく、時系列的な変化に伴うセルフエスティームの安定性（時系列的に変動がないこと）と

変動に関わる遺伝的要因と環境的要因の寄与率についても相対的に推定することができるからである。たとえば、セルフエスティームの形成には、専ら環境的要因だけが寄与しているのか、あるいは環境的要因の寄与だけではなく遺伝的要因の寄与も認められるのだろうか。また、両者の要因の寄与について推定した結果は、包括的あるいは領域固有のセルフエスティームのどちらにおいても同様に認められるのであろうか。さらにセルフエスティームの安定性と変動に対して遺伝的要因と環境的要因がどの程度寄与しているのだろうか。ここで、もしセルフエスティームの安定性と変動に対して遺伝的要因の寄与がほとんど認められずに、セルフエスティームの変動には、ある環境的要因が強く寄与しているという行動遺伝学におけるモデルが支持されれば、その環境的要因に対して介入をすることにより、セルフエスティームが変動する割合は非常に高いことが推察されるのである。そして、このことについて検討していくことは、セルフエスティームの低さへの予防等を含めた学校教育における精神保健活動を効果的に行うために重要ではないかと筆者は考える。

そこで、本論ではこれまで行われてきたセルフエスティームに関する行動遺伝学研究の諸知見について概観していきたい。そして、この知見がセルフエスティームの低さを予防すること等を含めた学校教育における精神保健活動に対して、どのように関わっているのかについて考えていきたい。

2. セルフエスティームに関する行動遺伝学研究の展望

(1) セルフエスティームに影響する遺伝と環境の効果

セルフエスティームには、多様な環境的要因が影響していると指摘されている (Rockville, 1996)。たとえば、親と子どもの親密性の高さ (LeCroy, 1988)、親子間の愛着関係における安定性 (Paterson, Pryor, & Field, 1995) や仲間関係の良好さ (Townsend, McCracken, & Wilton, 1988) は、セルフエスティームを高めることが報告されている。あるいは

日常生活におけるストレス体験が多いほどセルフエスティームが低下することが報告されている (Pettit & Joiner, 2001; 高比良, 1998)。また, Markus & Kitayama (1991) は, セルフエスティームの形成において文化差があり, 日本を含めた非西欧文化においては他者との協調性といった環境的要因が専らセルフエスティームを形成する基盤になることを強調している。このように, 先行研究ではセルフエスティームの形成に関わる環境的要因の影響力に着目していることが伺える。しかし, セルフエスティームの形成には環境的要因が専ら寄与しているのであろうか。

Roy, Neale, & Kendler (1995) は, 17 歳から 55 歳までの双生児を対象にしたセルフエスティームに関する行動遺伝学研究を行った。この研究では, 2 時点 (約 1 年 4 カ月間隔) におけるセルフエスティームを測定した。その結果, 各時点におけるセルフエスティームに影響する遺伝的要因の寄与は 35% から 40% 程度を示していた。その一方で, その残りの寄与は非共有環境要因 (一緒に住んでいる双生児に対して家族内で双生児のそれぞれが独自である環境の影響を示す変数) の影響であり, 共有環境要因 (すべての家族成員によって共通である環境により家族成員が類似することを仮定した変数) の効果はほとんど認められなかった。

同様に, Kendler, Gardner, & Prescott (1998) は, 18 歳から 60 歳までの双生児を対象にしてセルフエスティームに関する行動遺伝学研究を実施した。その結果, 女性・男性共にセルフエスティームに影響する遺伝的要因の寄与は約 30% 程度であり, 非共有環境要因の寄与は約 70% 程度を示していた。また, Kamakura, Ando, & Ono (2001) は, 16 歳から 30 歳までの日本人の双生児を対象にして, セルフエスティームを測定した結果, セルフエスティームに影響する遺伝的要因と非共有環境要因がほぼ同程度に寄与しており (それぞれの要因の寄与率は約 50% 程度), 共有環境要因の効果はほとんど認められなかった。

Kendler, Myers, & Neale (2000) は, 女性の双生児を対象にした行動

遺伝学研究を行った。この研究では、セルフエスティーム、抑うつ感、不安やソーシャルサポート (social support) 等を測定し、これらの表現型の背後に寄与する遺伝的要因と環境的要因の影響力を推定した。その結果、セルフエスティームと抑うつ感、不安との関連の背後には共通した遺伝的要因と非共有環境要因が同程度に寄与していた。つまり、遺伝的要因と非共有環境要因の両者がセルフエスティームの低さや抑うつ感・不安の高さを導いている要因であることを示している。

その一方で、領域固有のセルフエスティームに対する遺伝的要因と環境的要因の寄与を推定している研究が唯一行われている。McGuire, Neiderhiser, Reiss, Hetherington, & Plomin (1994) は、Harter の質問紙を用いて、領域固有のセルフエスティームに関する行動遺伝学研究を行った。この研究では、9 歳から 18 歳までの双生児を対象にして身体的魅力等を含めた 6 つの領域に関するセルフエスティームを測定した。その結果、各領域におけるセルフエスティームには、遺伝的要因が中程度に影響していた。また、遺伝的要因以外の寄与は非共有環境要因により説明されており、共有環境要因の効果はほとんど認められなかった。

上述の行動遺伝学研究における諸知見から考察すると、セルフエスティームに対して少なくとも遺伝的要因の寄与が認められており、環境的要因が専らセルフエスティームに影響しているのではないことが示唆されている。そして、この結果は領域固有のセルフエスティームに関する研究においても同様であった。よって、セルフエスティームの形成要因を検証する際に、環境的要因が決定因であるかのように議論を展開することは不十分であると考えられる。また、セルフエスティームにも影響している環境的要因は、共有環境要因の寄与ではなく非共有環境要因の寄与であり、同様の結果が領域固有のセルフエスティームにおいても認められているのである。

セルフエスティームに影響する非共有環境要因について考えてみると、

たとえば、セルフエスティームに影響する環境的要因として、親子間における親密性や愛着関係等といった家庭環境要因が寄与しているとすれば、それらの要因はふたごのきょうだいのセルフエスティームに対して共通した効果をもつほど万能的に影響しているのではなく、彼らのセルフエスティームに対して異なる影響力をもっているといえよう。すなわち、家庭環境要因が子どものセルフエスティームに影響しているとは言っても、その要因は家庭内における子ども一人ひとりのセルフエスティームに対して別々の影響を与えていることが示唆されるのである。また、セルフエスティームに影響する非共有環境要因として家庭外の個人経験の要因も想定されるであろう。その具体例の一つとして、親友のような自分にとって重要なある人物に認められること等の経験が挙げられよう。このような経験は、McGuire et al. (1994)の研究における社会的承認といった領域のセルフエスティームに影響している非共有環境要因を表わしているかもしれない。

概して、ある一時点におけるセルフエスティームの形成には少なくとも遺伝的要因の寄与が認められるものの（寄与率 30～50% 程度）、非共有環境要因は遺伝的要因と同程度かあるいはそれ以上に寄与している（寄与率 50～70% 程度）といえるが、では、この両者の要因はセルフエスティームの安定性と変動に対して、どのように寄与しているのだろうか。そこで、次項ではこの問題について考察していきたい。

(2) セルフエスティームの安定性と変動に影響する遺伝と環境の効果

セルフエスティームの発達における研究では、セルフエスティームの安定性 (stability) と変動 (change) について主に着目されてきた。これらの研究では、一定の期間内（約 1 年から 5 年）における縦断的研究を用いて、セルフエスティームのテスト-再テスト相関を分析することにより、セルフエスティームが時系列的にどの程度安定あるいは変動しているのかについて検証している²⁾ (Bachman & O'Malley, 1977; Block & Robins,

1993; Roeser & Eccles, 1998).

たとえば, Roberts & Bengtson (1996) は, 17 歳時と 20 歳時における二時点間のセルフエスティームについて測定した. その結果, 二時点間のセルフエスティームにおけるテスト-再テスト相関は, 高い値 ($r = 0.75$) となることを示していた. また, Trzesniewski, Donnellan, & Robins (2003) は, 4 カ国のサンプルを調査対象にして, セルフエスティーム³⁾の発達における安定性について検証している. この調査では, 各国におけるデータから算出されたセルフエスティームのテスト-再テスト相関⁴⁾を収集して, 各年齢段階における相関の平均を算出した. その結果, 他の年齢段階 (児童期や老年期等) と比較して, 青年期から成人期におけるセルフエスティームのテスト-再テストの相関は高い値を示していた. このように, セルフエスティームの発達における安定性と変動の相対的な割合は, 各発達段階において異なっていることが推察される. しかし, セルフエスティームの発達における安定性と変動を生じさせる諸原因についてはほとんど検証されていない. そこで, わずかな数ではあるが, この問題について検証した行動遺伝学研究について概観していきたい.

Roy et al. (1995) は, 双生児を対象にして, 二時点間 (約 1 年 4 カ月間隔) における縦断的研究を用いてセルフエスティームについて測定した. その結果, セルフエスティームの安定性には, 遺伝的要因と非共有環境要因の両者がほぼ同程度に寄与していることを示していた. また, 領域固有のセルフエスティームについても, その安定性と変動に関する遺伝的要因と非共有環境要因の寄与について推定されている. Mcguire, Manke, Saudino, Reiss, Hetherington, & Plomin (1999) は, 双生児を対象にして, 二時点間 (約 2.6 年間隔) における縦断的調査を用いて, 身体的魅力等を含めた 6 つの領域を含めた領域固有のセルフエスティームについて測定した. その結果, ほとんどの領域 (運動能力や身体的魅力等) におけるセルフエスティームの安定性には遺伝的要因が強く影響していた. ま

た、全ての領域におけるセルフエスティームの変動に対しては非共有環境要因が影響していた。

最後に、近年行われた鎌倉・安藤(2004)の研究についてみていきたい。この研究では、日本人の双生児を対象にして、二時点間(約1.3年間隔)における縦断的研究を用いてセルフエスティームを測定した。この結果、セルフエスティームの安定性が高く、その安定性に対して遺伝的要因と非共有環境要因がほぼ同程度に寄与していた⁵⁾。この知見はRoy et al.(1995)の結果を支持するものであった。また、セルフエスティームの変動に対して独自の遺伝的要因の寄与はほとんど認められなかった一方で、その変動に対しては独自の非共有環境要因が寄与していた。また、セルフエスティームの変動に影響する独自の非共有環境要因の寄与率は、約35%程度と推定された⁶⁾。

上記の結果から、仮にセルフエスティームの変動に影響する独自の非共有環境要因に対して介入をしたときに、その介入の効果としてセルフエスティームがある程度変動すること(低いセルフエスティームが高まること)が予測される。ここで具体例を一つ挙げてみたい。Pettit & Joiner(2001)は、日常的なストレス体験(たとえば、学校環境や友人関係等)の多さがセルフエスティームの変動(セルフエスティームが低くなる)に影響していることを報告している。そこで、学校環境や友人関係等を含めた日常的なストレス体験の程度がセルフエスティームの変動に影響する独自の非共有環境要因を表わしている表現型であると仮定しよう。このときに、学校環境や友人関係等を含めた日常的なストレスに対する介入により、日常的なストレス体験が減少し、その介入の効果としてセルフエスティームがある程度高まることが予測されるのである。では、このような知見がセルフエスティームの低さへの予防等を含めた学校教育における精神保健活動のあり方を考えていく際にどのように関わっているのだろうか。このことについて次節において述べていきたい。

3. セルフエスティームに関する行動遺伝学研究の知見と学校教育における精神保健活動

第一節において述べてきたように、セルフエスティームの低さと共に不安や抑うつ感の高さを含めた精神的健康度の悪化が継続すれば、日常生活にも支障をきたすことが指摘されている。したがって、このような精神的健康度の悪化を予防するための効果的な介入を行うことが必要とされる。一方、元永(2003)は、精神的健康度の悪化に対する予防・介入を含めた精神保健活動が医療現場だけでなく、学校教育においても重要になりつつあることを指摘している。スクールカウンセラーといった精神保健に関わる専門家を配置している学校が年々増加していることから(原, 2001)、学校教育における精神保健活動が重要視されているといえる。

また、現状においては、子どものセルフエスティームの低さ等を含めた精神的健康に関わる問題に関して着目されつつあり、そのために学校教育に関わる教育関係者は、スクールカウンセラー等との連携を通じて有効な対応策を考えていく必要性が高まっている(高倉, 2004)。そして、有効かつ具体的な対応として学校内では相談室が開設されており、そこでは、スクールカウンセラーが子ども一人ひとりの環境的要因に応じて子どもの精神的健康に関わる問題に対して介入を行うことが可能になっている。

ただし、スクールカウンセラーを含めた教育関係者は恣意的な解釈ではなく実証的な根拠に基づいて、子どものセルフエスティームの低さ等を含めた精神的健康に関わる問題に対して有効な介入法について考えるべきではないだろうか。たとえば、低いセルフエスティームを高めるために有効な介入を行うためには、子どものセルフエスティームの形成に対してどのような要因に着目して介入をすればよいのだろうか、そして、その介入を用いることにより、どの程度の効果が予測されるのかについて実証的な検討が求められるだろう。

では、学校教育において、セルフエスティームの低さといった精神的健

康度の問題に対して有用な介入を行うためにはどのような知見が期待されるであろうか。この問題に対して、大宮・清水(2003)は、セルフエスティームを形成する学校環境における諸要因(学校内の友人関係の信頼等)の影響について着目し、その環境的要因に対する実践的介入が子どもの低いセルフエスティームを高めるための一助となる可能性を示していた。しかし、このような介入の効果がどの程度予測されていたのかについては推測されない。

これに対して、双生児を対象にした縦断的研究を用いた行動遺伝学研究の知見では、セルフエスティームの変動に対して独自の非共有環境要因が寄与していることを示してきた(寄与率 35% 程度)。そして、このことから、セルフエスティームの変動に対する独自の非共有環境に介入を行ったときにおいて、セルフエスティームがある程度変動する(低いセルフエスティームが高まる)ことが予測されるのである。このように、セルフエスティームの安定性と変動に対する遺伝的要因と環境的要因の寄与に関わる複雑な行動遺伝学におけるモデルについて解析することにより、たとえば、セルフエスティームの変動に対して独自に影響する何らかの環境的要因に介入をしたときに、その介入の効果はどの程度であるかについて推定することが可能となるのである。ただし、セルフエスティームの安定性と変動に関わる遺伝的要因と環境的要因の寄与を検証してきた行動遺伝学研究は非常に数少ないことから、上記の知見をより確かなものにするためにも、更なる研究の蓄積が必要とされるであろう。

概して、子どもの低いセルフエスティームを高めるためには、セルフエスティームの変動に独自に影響する非共有環境要因に対して有用な介入を行うことが求められよう。しかし、非共有環境とは一人ひとりによって異なる環境であり、それだけ多様な環境であることについて考えてみると、このような環境に対して有効的に介入をするためには、セルフエスティームに影響する非共有環境要因を表わしている具体的な環境について検証し

ていく必要があると考えられる。そして、このことは、学校教育において子どものセルフエスティームの低さ等を含めた問題に対する精神保健活動を効果的に行うために重要なことであると考えられる。

4. おわりに

前節では、これまでの行動遺伝学研究から得られた知見と学校教育における精神保健活動との関わりを考察してきた。最後に、セルフエスティームに関する行動遺伝学研究における今後の研究課題について触れていきたい。これまでの行動遺伝学研究では、セルフエスティームには遺伝的要因と非共有環境要因の両者が寄与していること、さらにセルフエスティームの安定性には遺伝的要因や非共有環境要因の寄与、その変動には非共有環境要因が影響していることを示唆している。ではこれらの要因を表している表現型は何であろうか。たとえば、セルフエスティームの変動に影響している非共有環境要因はどのような表現型により表されるのであろうか。

わずかな研究ではあるが、セルフエスティームに影響する遺伝的要因と非共有環境要因を表している表現型に関して検証されている。たとえば、パーソナリティ特性の一つである神経症傾向がセルフエスティームに影響する遺伝的要因の一部を表していることが報告されている (Roberts & Kendler, 1999; Wade, Martin, Tiggeman, Abraham, Treloar, & Heath, 2000)。また、Kendler et al. (2000) は、ソーシャルサポートがセルフエスティームに影響する非共有環境要因の一部を表している表現型であることを報告している。しかし、神経症傾向やソーシャルサポートといった表現型だけでセルフエスティームに影響する遺伝的要因と非共有環境要因の多くを表しているのではないだろう。セルフエスティームに影響する遺伝的要因と非共有環境を説明する表現型は、神経症傾向やソーシャルサポート以外にも存在するのではないかと考えられる。たとえば、セルフエスティームに影響する遺伝的要因を強く表している表現型の候補として気質

(損害回避等)が挙げられる (Kamakura, Ando, & Ono, 2004). あるいは、個々に特有なストレス要因は、セルフエスティームの変動に影響する非共有環境要因を表している表現型かもしれない。

セルフエスティームが非常に高揚する状態は望ましいとは必ずしも言えないが、少なくともセルフエスティームの低い状態は、精神的健康面から考えると決して好ましいことではない。そして、セルフエスティームの低さを含めた問題に対して学校教育における精神保健活動を効果的に行うために、上述の問題について解明することが必要とされ、このことは今後の研究課題とされよう。

注

- 1) この節以降において、「セルフエスティーム」と表記している場合は、全て包括的セルフエスティームを指すものとする。
- 2) 2時点間におけるセルフエスティームのテスト-再テスト相関 ($0 \leq r \leq 1$) の値が高いほどセルフエスティームの安定性は高くなる反面、その変動は低くなることを示す。
- 3) この各国における調査では、全て Rosenberg (1965) が作成した質問紙を用いて測定している。
- 4) 各国のデータにおいて、調査対象者の年齢群の分類方法、測定期間、測定回数は異なっている。たとえば、米国の場合は調査対象 (25 歳から 83 歳まで) をいくつかの年齢群に分類し、その年齢群ごとの 2 時点 (3 年間隔) におけるセルフエスティームのテスト-再テスト相関を算出している。
- 5) 二時点間のセルフエスティームの表現型相関 (上述したテスト-再テスト相関に相当する) は高い値を示しており、 $r=0.72$ であった。また、セルフエスティームの安定性に関わる遺伝相関は 0.38 (遺伝的要因の寄与を示す) となり、環境相関は 0.34 (非共有環境要因の寄与を示す) であった。
- 6) 二時点目に測定されたセルフエスティームの全分散を 1 (寄与率 100%) としたときに推定された寄与率である。

引用文献

Abe. J. A. (2004) Self-esteem, perception of relationships, and emotional dis-

- tress: A cross-cultural study. *Personal Relationships*, **11**, 231-247.
- Bachman, J. G., & O'Malley, P. M. (1977) Self-esteem in young men. A longitudinal analysis of the impact of educational and occupational attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 365-380.
- Block, J., & Robins, R. W. (1993) A longitudinal study of consistency and change in self-esteem from early adolescence to early adulthood. *Child Development*, **64**, 909-923.
- Brown, G. W., Andrews, B., Harris, T., Adler, Z., & Bridge, I. (1986) Social support, self-esteem and depression. *Psychological Medicine*, **16**, 813-831.
- Byrne, B. (2000) Relationships between anxiety, fear, self-esteem, coping strategies in adolescence. *Adolescence*, **35**, 201-215.
- 榎本博明 (1998) 「自己」の心理学 自分探しへの誘い
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., Burling, J., Simon, L., Solomon, S., Rosenblatt, A., Lyon, D., & Pinel, E. (1992) Why do people need self-esteem? Converging evidence that self-esteem serves as anxiety-buffering function. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 913-922.
- 原 裕規 (2001) スクールカウンセラー —コミュニティ心理学的アプローチ 山本和郎 (編) 臨床心理学的地域援助の展開—コミュニティ心理学の実践と今日的課題 培風館
- Harter, S. (1982) The perceived competence scale for children. *Child Development*, **53**, 87-97.
- Jones, W. H., Freeman, J. E., & Goswick, R. A. (1981) The persistence of loneliness: Self and other determinants. *Journal of Personality*, **49**, 27-48.
- 鎌倉利光・安藤寿康 (2004) セルフエスティームの発達における遺伝と環境の効果 日本発達心理学会第15回大会発表, 白百合女子大学, 238.
- Kamakura, T., Ando, J., & Ono, Y. (2001) Genetic and environmental influences on self-esteem in a Japanese twin sample. *Twin Research*, **4**, 439-442.
- Kamakura, T., Ando, J., & Ono, Y. (2004) Genetic and environmental factors shared between self-esteem and temperament dimensions. (Abstract of the 11th International Congress on Twin Studies). *Twin Research*, **7**, 359.
- Kendler, K. S., Gardner, C. O., & Prescott, C. A. (1998) A population-based twin study of self-esteem and gender. *Psychological Medicine*, **28**, 1403-1409.

- Kendler, K. S., Myers, J. M., & Neale, M. C. (2000) A multidimensional twin study of mental health in women. *American Journal of Psychiatry*, 157, 506-513.
- LeCroy, C. (1988) Parent-adolescence intimacy: Impact on adolescent functioning. *Adolescence*, 23, 137-147.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991) Culture and self: implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- McGuire, S., Manke, B., Saudino, K. J., Reiss, D., Hetherington, E. M., & Plomin, R. (1999) Perceived competence and self-worth during adolescence: A longitudinal behavioral genetic study. *Child Development*, 70, 1283-1296.
- McGuire, S., Neiderhiser, J. M., Reiss, D., Hetherington, M. E., & Plomin, R. (1994) Genetic and environmental influences on perceptions of self-worth and competence in adolescence: A study of twins, full siblings, and step-siblings. *Child Development*, 65, 785-799.
- 元永拓郎 (2003) 学校における精神保健—リスクマネジメントの視点から— 学校メンタルヘルス, 6, 81-86.
- 大宮美智枝・清水安夫 (2003) 高等学校における「いのちの教育」の研究 I 学校メンタルヘルス, 6, 49-58.
- 小塩真司 (2001) 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44.
- Paterson, J., Pryor, J., & Field, J. (1995) Adolescent attachment to parents and friends in relation to aspects of self-esteem. *Journal of Youth and Adolescence*, 24, 365-376.
- Pelham, B. W. (1995) Self-investment and self-esteem: Evidence for a Jamesian model of self worth. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 1141-1150.
- Petersen, A. C. (1987) The nature of biological-psychological interactions: The sample case of early adolescence. In R. M. Lerner & T. T. Fosh (eds), *Biological psycho-social interactions in early adolescence*. Pp. 35-61. Lawrence Erlbaum Associates.
- Pettit, J. W., & Joiner, Jr, T. E. (2001) Negative life events predict negative feedback seeking as a function of impact on self-esteem. *Cognitive Therapy and Research*, 25, 733-741.
- Roberts, J. E., & Monroe, S. M. (1994) A multidimensional model of self-

- esteem in depression. *Clinical Psychology Review*, **14**, 161-181.
- Roberts, R. E., & Bengston, V. L. (1996) Affective ties to parents in early adulthood and self-esteem across 20 years. *Social Psychology Quarterly*, **59**, 96-106.
- Roberts, S. B., & Kendler, K. S. (1999) Neuroticism and self-esteem as inducers of the vulnerability to major depression in women. *Psychological Medicine*, **29**, 1101-1109.
- Rockville, M. D. (1996) Basic behavioral science research for mental health. Vulnerability and resilience. *American Psychologist*, **51**, 22-28.
- Roeser, R. W., & Eccles, J. S. (1998) Adolescents' perceptions of middle school: Relation to longitudinal changes in academic and psychological adjustment. *Journal Research on Adolescence*, **8**, 123-158.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Rosenberg, M. (1979) *Conceiving the self*. New York: Basic Books.
- Roy, M., Neale, M. C., & Kendler, K. S. (1995) The genetic epidemiology of self-esteem. *British Journal of Psychiatry*, **166**, 813-820.
- 高倉和子 (2004) 現代の学校と教育病理 山崎清男 (編) 教育学を学ぶ 川島書店
- 高比良美詠子 (1998) 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, **14**, 12-24.
- Townsend, M. A. R., McCracken, H. E., & Wilton, K. M. (1988) Popularity and intimacy as determinants of psychological well-being in adolescent friendships. *Journal of Early Adolescence*, **8**, 421-436.
- Trzesniewski, K. H., Donnellan, B., & Robins, R. W. (2003) Stability and self-esteem across the life span. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 205-220.
- Wade, T., Martin, N. G., Tiggeman, M., Abraham, S., Treloar, S., & Heath, A. C. (2000) Genetic and environmental risk factors shared between disordered eating, psychological and family variables. *Personality and Individual Difference*, **28**, 729-740.
- Wild, L. G., Flisher, A. J., & Lombard, C. (2004) Suicidal ideation and attempts in adolescents: associations with depression and six domains of self-esteem. *Journal of Adolescence*, **27**, 611-624.
- Winston, J. H. (1996) Scores of middle-school-age students on the Rosenberg self-esteem scale. *Psychological Reports*, **78**, 1071-1074.